パラアスリートの障害/健常間の自己受容における意識変容について

-死と再生の二重モデルに依拠して-

野田 乙心　（　筑波大学　）

１．目的

社会から障害者/健常者と差別されることで表出する障害者の困難は、個人の価値観や可能性の多くを変化させる要因となるものである。そのため、障害の有無に関わらず人々が共生できる社会の創造には、障害者自身の心理的な『葛藤』を明らかにし、『自己受容』を良好にするための『意識変容』に目を向ける必要がある。本研究では、障害を有しながらも、パラ競技と健常者競技の双方で活躍する選手１名へのインタビューから、パラアスリートの自己受容過程において、障害受傷から現時点までの障害/健常という双方間への葛藤と、心理的回復過程における自己受容の変容を、個人的及び社会的側面から明らかにする。その際に表出した変容について、中途身体障害者の心理的回復過程を示す“死と再生の二重モデル”(盛田ら, 2007)に依拠して考察を行う。

２．研究方法

１）対象者：水泳競技歴 15 年・パラ水泳競技歴１年の視覚障害を有する 20 代トップアスリート１名

２）調査方法：対象者に対して、202X 年のある１日に、東京都内の閑静な場所において、表１に示す質問項目をもとに半構造化インタビューを実施した。

表１　質問項目

●個人的側面 ①　障害者を取り巻く現状と日常生活での生きづらさ ②　障害を持ちながら競技を続ける上での困難感
●社会的側面 ③　「平等」の捉え方と周囲にどのような「平等」を求めるか ④　障害者に対する日本社会の課題

３）分析方法：結果の分析にあたり、盛田ら(2007)の研究で示された“死と再生の二重モデル”に則って分析を行うことで、自己受容の変容を明らかにした。

３．結果と考察

本研究の結果を、パラアスリートの障害/健常間の観点から分析したところ、①日常生活・競技生活をする上で表出する障害への不安や恐怖、②健常者/障害者が区別されない社会への羨ましさ、③「障害者」として括られることへの抵抗感とやるせなさ、④障害を理由に離れていく周囲への怒りや失望という４つが『葛藤』として考えられた。加えて、自己受容のプロセスには、“死と再生の二重モデル”と同様、『葛藤から受容、包含及び部分的な切断』が認められた。

４．結論

本研究から、パラアスリートは先述した４つの葛藤に向き合い、上記したプロセスを踏むことができれば、包括的な自己受容に繋げることができると考えられた。またこの結果は、盛田ら(2007)の“死と再生の二重モデル”に存在した因子の関係性を示す４つと同一であり、“死と再生の二重モデル”の有用性を示す結果となった。

５．主な参考文献

１）盛田祐司・阿部真里子，中途身体障害者の心理的回復過程におけるライフストーリー研究 –個人的・社会的側面による仮説的モデル生成の試み–，質的心理学研究，第６巻１号, 98-120